

専修大学
創立130年
記念企画
第07回

日本を変える、
世界を動かす！
社会知性の
チカラ

The Potentiality for "Socio-Intelligence"

世の中を俯瞰する創作&ジャーナリズムの眼

メディアの現場で報道や番組制作、出版活動などに携わる「専修人」が増えてきた。また、ミステリーをはじめとする創作分野でも卒業生の受賞が相次いでいる。ペンと足で、社会を動かし世論や流行形成の一助を担ってきた二〇人を紹介しよう。

興味のあることを自分で調べる習慣と、
就職活動でメディアを目指したことが財産に

専修大学の文学部を選んだのは、法律や経済といった堅いイメージのある学問よりも、「柔らかい」勉強をしたいと考えたからです。入学後は、親に経済的な負担をかけたくないという気持ちもあり、料理店の皿洗いやバス旅行の添乗員、マーケティング会社の事務など、さまざまなアルバイトを経験しました。大学の教室の雰囲気嫌いではなかったのですが、講義には割とまじめに出ていたほうだと思えます。授業では、興味のあることについて自分たちで調べを進める演習科目が好きでした。たとえば一般教養中心の「二

いて文芸誌に応募し、落選した原稿をマスコミ演習でお世話になった権田萬治先生に送って講評を仰いだことはありましたが、当時はそれほど具体的に作家志望の気持ちを持っていたわけではありませんでした。

卒業後は出版社に勤めたり、実家に戻って家業を手伝ったりしながら、次第に小説を書くことに対する思いがふくらみ、その後、新人賞への挑戦が実ってデビューすることができました。今後は、一作、一作、いい小説を、それも読者が思わず読むのをやめられなくなるような作品を描き続けていきたいと思っています。メディアへの就職や創作の分野で活動する専修人も徐々に増えてきました。後輩の皆さんも強い気持ちで、壁を破っていつてほしいです。

ゼミの友人に触発され、
マスコミ就職を目指す

また専門の演習のほうでは、二年次に家族社会学の米地實ゼミで伊勢原の農村部の、三年次には都市社会学の広田康生ゼミで佃の再開発のフィールドワークに行きました。卒論は地下街をテーマにしましたので、川崎のアゼリアに運営の実情を聞きに行ったりもしました。卒業する前後に短編小説を書く

ただ、クリエイティブな仕事についての興味は漠然と持っていて、同じゼミにマスコミ志望の友人がいたこともあり、彼に触発されるようなかたちで、マスコミへの就職を目指すようになりました。就職課主催のマスコミ就職講座にも友人と一緒に参加して、伊勢原のセミナーハウスで早朝なぜかランニングさせられたのも覚えています。

大学院で培った膨大な
資料の読み込みと体力が
脚本家人生のベースにある

脚本家
渡邊睦月
(1997年文学研究科修士課程修了)
茨城県出身。大学院修了後、シナリオ講座受講を経て脚本家に。代表作に『輪舞曲〜RONDO〜』『生徒諸君』『恋空』など。世田谷文学賞、テレビ朝日・21世紀シナリオ大賞優秀賞受賞。近著に『100eggs』（幻冬舎）。



文

学部と大学院では、柘植光彦ゼミ（現代文学）で学びました。映画やゲーム、マンガなど「物語」があるものなんでも素材になるゼミで、大学院では中島みゆきや井上陽水の歌詞のなかにある「作家性」について調べました。ゼミでは膨大な資料を読み込む必要があり、資料や活字を前にしてもへこたれない根性と、情報を取捨選択する能力が身につきました。学部時代から小説家志望でしたが、思ったものが書けず気持ち

数学的に練られたストーリーに打たれました。これだ！と思いい、翌日には一晩で作品を書き上げました。以来、脚本家になろうと決心。スクールでの授業や応募など、人の一〇〇倍は努力するつもりでやってきました。現在は、娯楽物から社会・歴史作品まで幅広く書いています。小説とは違い、時間や枚数といった「縛り」があるなかで、最良のものを作ろうと心をかけています。脚本家は、直してナンボ。専大で培った資料との格闘と情報の取捨選択能力が、日々の仕事に生きています。

やってみないと気がすまない。
ライター、作家の可能性に
近いところに常にいた

作家
桂 美人
(1996年商学部卒業)
福井県出身。卒業後、出版社での営業、経理などに携わりながら執筆を続ける。07年『ロスト・チャイルド』で第27回横溝正史ミステリ大賞を受賞。08年『マラリア』を発表、今夏『エンディング・ノート』を発刊予定。



い

ずればライターになりました。いいと思い、就職活動はメディア一本。出版社の編集という希望はかなわなかったものの、出版社にいて夢を持ち続けられると考え、営業職として入社しました。その後、商学部で得た簿記や会計の知識を買われて、経理や総務・秘書的な仕事にも就きました。

二〇代後半は、一転して司法試験に興味を覚え勉強の日々に何事もやってみないと気がすまない性格なんです。それが、二度目の司法試験を受ける前に、「これだけ（論文を）書くなら

テレビにラジオ
出版界で
取材・創作に
励む
—クリエイターたち

日本テレビ放送網報道局解説委員
高田和男
(1970年文学部卒業)
神奈川県出身。卒業後、日本テレビに入社。報道局に配属。気象庁、厚生省、科学技術庁記者クラブなどを経歴。「からだ元気科」などの制作責任者として医療報道にも貢献。「高田塾」塾長。



作家・執筆アドバイザー
上野 歩
(1988年文学部卒業)
東京都出身。卒業後、会社勤務を経て、94年『恋人と一匹の狼』で小説家デビュー。06年『ふれあい散歩 じんわりほのぼののエッセイ』（朝日新聞）出版。



編集者
山口ミルコ
(1988年文学部卒業)
東京都出身。角川書店雑誌編集部を経て当時の上司（現・幻冬舎社長、見城徹氏）の独立を機に94年、幻冬舎へ。有名作家の小説や芸能人のエッセイなど多数の書籍を出版。09年、独立。



4年間スウィングジャズ研究会に所属して、サクソとクラリネットを担当しました。演奏について仲間と熱く議論を交わし、いろいろと勉強になりました。ビッグバンドでの演奏という、皆で一つのものを成し遂げる達成感を味わえたことは、貴重な財産になっています。

在学中は、文学研究会で文芸誌の制作に携わり、卒業後も一般企業に勤めながら執筆活動を続けました。「自分が本当に好きなこと」を続けてきたことで、作家への道が開けたと思います。皆さんも、すぐに仕事にできなくても、「一生続けられるのか」を在学中に見つけてください。

卒業式で聞いた川島正次郎総長の言葉「泥にまみれた著名人になるよりも、善良で愛と親切に徹した社会人として立派な社会づくりに参加してほしい」が胸に残ります。専大で学んだ報恩奉仕の精神と併せ、日本の医療再生のための塾を開き、本音の討論と行動を進めています。

フリーライター
嵩元友子
(1991年文学部卒業)
東京都出身。在学中は土井正興ゼミに所属。卒業後、編集プロダクション、出版社勤務を経て、フリーライターとなる。06年、『銀座並木座 日本映画とともに歩んだ四十五年』（鳥影社）出版。



NHK横浜放送局キャスター
日高治子
(1999年経営学部卒業)
神奈川県出身。卒業後、04年にNHK長野放送局入社。FM長野でもリポーターを務める。現在はNHK横浜放送局で「こんにちはいって6けん」「よこはまサウンドリチャトル」に出演中。



エンビツむすめ代表
小松亜子
(2001年文学部卒業)
長野県出身。97年、卓球部で全日本学生大会ダブルスベスト16に。在学中、マスコミ志望の学生を支援する「えんびつ女房」現・エンビツむすめ）を起業。07年『らくこ☆まがじん』創刊。



テレビ東京 スポーツ局記者
石原伶奈
(2007年文学部卒業)
静岡県出身。テニス部に所属。04年、関東学生選手権シングルス優勝。06年、全日本学生室内選手権シングルスベスト8。テレビ東京入社後、中継ディレクターを経て現在野球記者として活躍。



テニス部では、我慢強く努力を続ける精神力や体力を養い、そのなかでスポーツをすることの楽しさ、難しさを経験してきました。今後は、伝える側の立場として、深い取材と広い感性を持ち、多くの人に夢を与える一流のスポーツ選手たちの姿を、視聴者の方に届けていきたいです。

在学中、ケガで卓球選手が続けられないとわかったあとも、プレーできない葛藤のなか「緑の下の方」そしてチームを支え続けました。負けん気と根性で物事をやり通したそのときの経験や部活動で得た人脈は、学生で立ち上げた今の会社を運営するエネルギーにもなっています。